

## 大正時代の傑作

池を中心とした回遊式庭園である毛利氏庭園は、造園師佐久間金太郎の名作であり、明治（1868～1912年）・大正期（1912～1926年）の美学を完璧なかたちで表現した庭園です。日本庭園によく見られるように、背景には人工の庭園を多々良山と調和よく組み合わせ、前景は三田尻湾や瀬戸内海を借景して作られています。平らな空間（平庭）と木立や泉水を特徴とする空間（林泉）を組み合わせ、季節を問わず美しく見えるよう設計されています。

庭園には約 250 種の樹木が植えられています。特に松の木は、凝った形のもの、単に背が高だけのものも含め、庭園の至る所に植えられています。屋敷のすぐ横に設けられた平庭は、近くの海辺を思い起こさせるよう、砂で覆われています。

池はひょうたん形（富と繁栄の象徴）をした、大きな岩に囲まれた小さな水域で、その水は半円形の太鼓橋を過ぎた部分で飛瀑として注がれる遣水によってたたえられています。池の小さい方は、溪谷の風景を思い起こさせながら、同時に岩（一枚岩としては庭園中最大の岩）の表面に落ちる水の音で聴く耳を喜ばせるようにも設計されています。

庭園には 19 の石灯籠が置かれています。橋に通じる道のすぐ右側にある大変大きな石灯籠の土台は、建てられた当時は材料としてまだ珍しかったセメントで作られています。庭全体の下を通る排水溝もまた、

見えない「新」技術といえます。

庭園の回遊後は、かつて毛利家のオフィスとして使われていた、雰囲気抜群の古い建物にある茶房「舞衣（まい）」にお立ち寄りになることをお勧めします。

（庭園内の季節の花の詳細をご覧ください。）

